



「今こそ家庭科、技術・家庭科の力を発揮しましょう！」

御承知の通り、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により、教育現場はもちろん、様々なところで様々な問題が発生し、その対応に追われる毎日でした。現在も、例えば調理実習や保育体験学習など、本科が重要視してきた実践的・体験的な学習を安全に行うための環境整備に四苦八苦している状況です。

本年度に入り、市教育委員会あるいは自治体、地元業者等々から児童生徒に対し、畜産・農作物の寄贈が複数ありました。ありがたくいただく一方で、食にかかわる生産者の御苦勞を痛感しています。休校期間中は、給食のために準備されていた多くの食材が廃棄処分になるなど、大きな話題にもなりました。安価でも売り上げがあるなら食品ロスも減る訳ですが、生産者にとってはつらい状況であったことでしょう。

「生活の営みに係る見方・考え方」を研ぎ澄ませて

ここで出番となるのが、本教科です。消費者教育を重視し、様々な学習課題とつなげて持続可能な社会の実現を目指す本科の学びにおいて、コロナ禍における現状の食に関する課題は、ぜひとも授業で取り上げたい内容だと考えます。私たちの食を支える生産者を守ることにについては、幼少のころから丁寧に教え、考えさせ、小・中学校では本教科が目指す「生活の営みに係る見方・考え方」に照らした学習場面を設定したいものです。

家庭科、技術・家庭科（家庭分野）における生活の営みに係る見方・考え方は、「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」とあります。コロナ禍で、食を支える生産者あるいは飲食店などの提供者の現状を調査し、自分ならどんなかわりができるかを課題にする。生産者や提供者が、私たちが生きていく上で重要な人々であることを再認識する良い機会でもあり、こうした課題は、各学年に応じた課題設定のもと取り上げることができるのではないのでしょうか。高学年なら、日本国内にとどまらず海外にも目を向け、輸入食材の現状まで調査し追究する展開も、興味深い学びになると考えます。社会科や総合的な学習の時間とつなげ、深く掘り下げて学ばせたいものです。



「SDGs 未来都市」を宣言する浜松市は、SDGsを達成するために様々な対策を立て、働きかけをしています。私たち教職員自身も「生活の営みに係る見方・考え方」を研ぎ澄まし、御自身の消費行動を見直して、浜松の未来を背負う目の前の子供たちにもよりよい消費について語り掛けていきたいですね。

中学校家庭科部顧問校長
平野 敦子



Q. 学習指導要領改訂のポイントと教科書の効果的な活用についてアドバイスをください。

□学習指導要領改訂のポイント

新年度が始まり、半年余りが経過しました。ここで改めて、学習指導要領改訂に伴う主な学習内容のポイントを確認したいと思います。

A 家族・家庭生活

- (1) 自分の成長と家族・家庭生活 (2) 家庭生活と仕事
(3) 家族や地域の人々との関わり (4) 家族・家庭生活についての課題と実践

A 家族・家庭生活では、「(3) 家族や地域の人々との関わり」の「イ 家族や地域の人々とのよりよい関わりについて考え、工夫すること。」において、「幼児又は低学年の児童、高齢者など異なる世代の人々との関わりについても扱うこと。」が示されています。この内容は、中学校の「介護の基礎」、高等学校の「認知症」の学習につながります。中学校の学習指導要領には、「中学生の自分は支えられるだけではなく、家族や地域の一員として支える側になることができる」「視力や聴力、筋力の低下など中学生とは異なる高齢者の身体の特徴が分かり、それらを踏まえて関わる必要があることを理解できるようにする」と述べられています。小学校の学習は中・高等学校の学習の基盤になります。家庭や地域と積極的に連携を取り、具体的な場面から、家庭生活と地域とのつながりや地域の人々との協力の大切さに気付かせる指導が求められます。

「(4) 家族・家庭生活についての課題と実践」では、2 学年間で一つ又は二つの課題を設定して履修させることが掲げられています。「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の学習との関連を図り、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、計画を立てて実践した結果を評価・改善し、考えたことを表現するなどの学習を通して、課題を解決する力と生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うことがねらいです。冬休みなど長期休みを活用して、子供たちが、自分の手で家庭生活をよりよくすることの楽しさや面白さを感じる学習機会を設定するとよいでしょう。

B 衣食住の生活

- (1) 食事の役割 (2) 調理の基礎 (3) 栄養を考えた食事
(4) 衣服の着用と手入れ (5) 生活を豊かにするための布を用いた製作
(6) 快適な住まい方

B 衣食住の生活では、「(2) 調理の基礎」の「ア(イ) 材料に適したゆで方、いため方を理解し、適切にできること。」において、「ゆでる材料として青菜やじゃがいもなどを扱うこと。」が示され、題材が指定されています。青菜はお湯でゆでる、じゃがいもは水からゆでる、なぜ違いがあるのだろうか？その根拠を探ることを通して、「材料に適したゆで方」の理解をより深めることができます。また、「(3) 栄養を考えた食事」の「ア(ア) 体に必要な栄養素の種類と主な働きについて理解すること。」では「五大栄養素と食品の体内での主な働きを中心に扱うこと。」が示されています。この内容は、中学校での日本食品標準成分表や食事摂取基準、食品群別摂取量の目安などの学習につながっていきます。私たちは体に必要な栄養素を食事によってとっていること、栄養を考えて食事をとることの大切さを理解できるように指導することが求められます。

「(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作」では、「日常生活で使用する物を入れる袋などの製作を扱うこと。」と述べられています。ゆとりや縫いしろの必要性を考えさせるなど、製作の手順の根拠に関する理解を深めましょう。(5)の項目名「生活を豊かにするための布を用

いた製作」は、これまでの「生活に役立つ物の製作」の項目名から改訂されています。すなわち、布を用いた物に関心を持ち、布の特徴を生かして生活を豊かにするための物を考えて製作できるようにすることが期待されています。自らの手で生活を豊かにし、楽しもうとする態度の育成につなげることが臨まれます。

「(6) 快適な住まい方」では、「ア(7) 住まいの主な働きが分かり。季節の変化に合わせた生活の大切さや住まい方について理解すること。」において「主として暑さ・寒さ、通風・換気、採光、及び音を取り上げること。」が示され、音に関する内容が加わりました。音も環境の一部です。家族や地域の人々との関わりと関連させて、共に快適に住まうために工夫するなどの学習活動を取り入れましょう。

C 消費生活・環境

(1) 物や金銭の使い方と買物

(2) 環境に配慮した生活

C 消費生活・環境では、「(1) 物や金銭の使い方と買物」の「ア(7) 買物の仕組みや消費者の役割が分かり、物や金銭の大切さと計画的な使い方について理解すること。」において、「売買契約の基礎について触れること。」が示されました。子供に身近な例で契約と約束の違いに気付かせたり、買物のどの場面で売買契約が成立したのかなど、具体的場面を取り上げて指導するとよいでしょう。

「(2) 環境に配慮した生活」の「イ環境に配慮した生活について物の使い方などを考え、工夫すること。」では、身近な環境をよりよくしようと工夫する実践的な態度の育成を図ることがねらいです。「B衣食住の生活」との関連を図り、実践的に学習できるように配慮しましょう。

□教科書を効果的に活用する

先生方は、日頃の授業で、教科書をどのように活用されているのでしょうか。

導入で問題提示として活用する、学習内容の例示として活用する、学習活動の資料やヒントとして活用する、既習内容や学習内容の確認として活用する、学習のまとめに活用する、復習や宿題として活用するなどがあるでしょう。

教科書を用いて、学習の見通しをもたせて学習意欲を喚起したい、わかりやすく説明して理解を促したい、学習活動を円滑に行わせたい、前時や本時の学習内容を確認させて知識を定着させたいなど、教科書はさまざまな学習場面に応じた活用が可能です。

授業で教科書を効果的に活用するには、なぜ教科書を用いる必要があるのか、教科書を活用する意図を明らかにすることが求められます。その上で、どんな学習場面で、どのように活用するのが効果的であるかを検討する必要があります。

GIGA スクール構想など教育の情報化により、子供たちの学びをサポートする学習環境が整いつつあります。新しい教科書にQRコードが掲載されるようになりました。一斉学習によるこれまでの授業では、動画教材をクラスで一緒に視聴することが一般的でした。しかし、個別に動画教材を視聴することができれば、子供たち一人一人の理解の進度に合わせて繰り返し学習するといった個別学習が可能になります。また、グループで動画教材を視聴し、実習で行う作業のコツやポイントを話し合うなど、協働学習をサポートするツールとしての活用も可能になります。

教科書の活用の仕方を工夫することで、児童一人一人の能力や特性に応じた学びや、教え合い学び合う協働的な学びなど、新たな学びの創造につながります。教科書をもっと授業で活用する工夫についても、今後研究を深めていきたいと思えます。

静岡大学大学院教育学領域准教授

小清水 貴子